



プラットフォーム 「北海道価値創造 パートナーシップ」 を発足

国土交通省北海道局参事官

国土交通省では、「北海道総合開発計画」のビジョンである「世界水準の価値創造空間」の形成を目指して取り組んでいるところであり、北海道の価値創造力を高めるため、関係機関と連携して地域づくり人材の支援・協働を図るプラットフォーム「北海道価値創造パートナーシップ」を発足しました。

北海道価値創造パートナーシップの活動としては、主に以下の3点に取り組むこととしています。

- ① 北海道内外の人材交流の場づくり
- ② 地域サポート力の向上
- ③ 優良な取組の評価・普及

平成29年1月21日(土)、プラットフォーム発足のキックオフイベントとなる「北海道価値創造パートナーシップ会議」を札幌市内で開催しました。

イベントは、「世界の北海道」の実現に向けた気運を高めるための講演会や、地域づくり人材による相互の交流会、ワールド・カフェなど、多彩なプログラムで構成し、約270名の方々に参加いただきました。

本稿では、当日の概要を報告します。

当日のプログラム

10:15～10:40	主催挨拶・活動宣言
10:40～11:40	講演
11:45～13:00	実践交流会 (昼食休憩時間を活用し引き続き交流)
13:45～18:00	ワールド・カフェ

主催挨拶



田村 秀夫
国土交通省北海道局長

2016年3月に新たな北海道総合開発計画が決定しました。北海道は、食の輸出や外国人旅行者が急増するなど、アジアの成長なども背景に強みが顕在化しつつあります。一方で、人口減少が全国より10年先行し、地域の持続可能性を高めることが求められて

います。

このため、新たな計画では、「食」や「観光」を戦略的な産業として振興するとともに、これらを生み出す地方部の「生産空間」を支え、地域の価値創造力を高め、「世界の北海道」を目指すこととしています。計画の策定に当たっては、北海道内で地域づくりに携わる方から直接意見をお伺いする「北海道価値創造パートナーシップ会議」を全道各地で開催しました。実際に現地へ赴き、色々な意見をお聞きしました。そのような意見も計画に反映しました。

計画の実現に向けて、行政だけではなく、地域で活躍されている方々との連携を深めながら、取り組んでいく必要があります。このため、産業界、地方公共団体、関係府省など関係機関・団体にも協力いただき、プラットフォーム「北海道価値創造パートナーシップ」を立ち上げることとしました。

地域の価値創造力を高めていくには、地域や住民の主体性を基礎として、道外や外国の方々等、多様な人材との活発な交流・コミュニケーションを図りながら、取り組んでいく必要があります。プラットフォームには、地域づくりに主体的に取り組む方々、地域づくりを支援する方々に広く参加を呼びかけております。多様な人材の緩やかな「つながり」とコミュニケーションの「ひろがり」を促進し、地域づくり人材の広域的・横断的な支援・協働の充実・拡大を図ることを目的としています。

本日の出会いや気づきが、北海道の魅力をさらに高め、世界に発信していく新たな契機となることを祈念いたします。

挨拶

北海道価値創造パートナーシップ活動は、様々な分野で地域づくりに携わる方々がつながり、コミュニケーションが広がることで、分野や地域を越えて横断的に協働するプラットフォームの役割を果たすものと考えています。

北海道においても、国の計画と軌を一にした新たな総合計画を策定しました。そのめざす姿である「輝きつづける北海道」の実現に向けて、様々な取組を積極的に推進していきます。市町村をはじめ、道内各地で地域を元気にしたいと頑張っておられる皆様との連携や共同が不可欠です。



山谷 吉宏 氏
北海道副知事

本日お集まりの皆様のご熱意と行動力に加え、北海道価値創造パートナーシップ活動を通じたネットワークの広がりが北海道を元気づけ、各地域の活性化につながる大きな力となることを確信しています。北海道が本来持っている力を最大限に活かし、北海道の新たな価値の創造が活発に行われること、そして、そのような中で、皆様のより一層のご活躍、道内各地域の一層の発展が図られることを祈念申し上げます。

活動宣言



佐藤 太紀 氏
㈱エフエムもえる
代表取締役社長

13年前、仲間と一緒に留萌でラジオ局を立ち上げました。しかし、実はラジオをやりたかったわけではなく、今日のキーワードである、まちづくりをするプラットフォームを作るために始めたのです。地域のことを、「自分ごと」として捉えられない人があまりに多く、すぐにネガティブキャンペーンが始まるので、それを打開したかったのです。自分でやりたいという自由意思があり、やりたいことをやる。結果として、自分の地域に関わる仕組みを作りたかったのです。

このプラットフォームは、時には私たちを誘導し、後方支援するような位置づけにもなってくると思いま

す。地域のことを自分ごととして考え、自分なりの課題を持ってこられた方も多いでしょう。そのような人達が集まれば、非常に面白いことができると思っています。今日という1日が終わったときには、一人一人の課題が少しでも解決できればと思いますし、非常にワクワクする出会いもあると信じています。今日は来て良かった、また来たいと思える場となることを期待し、活動宣言とします。今日は大いに楽しみましょう。

.....

私はオーストリア出身で、3年前から北海道大学で、地域づくりの研究やワークショップを行っています。

先程、北海道局長の発言にあったように、少子化と過疎化が急速に進む一方で、グローバル化も進んでいます。私が北海道大学で所属するプログラムは「現代日本学プログラム」といい、主に留学生向けのものです。一例をあげると、新十津川町との共同事業で、地元の新鮮な野菜を活用し、地元の女性の方々と一緒に新しいメニューを作るというミッションに取り組みました。国籍もばらばらで、もちろん料理の発想も全然違います。全く今までにない新しいメニューが生み出されました。

このミッションでは、背景が違う地元の女性と留学生が、考えを共有し、貴重な経験やつながりを持つことができました。このような横のつながりが、今日のワールド・カフェでもできれば良いと思います。英語には“thinking outside the box”という表現があります。今までになかった、常識を超えたようなものが、このような横のつながりによって生まれてくると、とてもワクワクします。これからの北海道の展開も、より面白くなるきっかけになればと思います。



クリーン スザンネ 氏
北海道大学
現代日本学プログラム 准教授

講演

国際ショナル ディスティネーション・ホッカイドウ～ニセコの事例を交えて～



ロス・フィンドレー 氏
株式会社NAC 代表取締役

今日は、国際ショナルディスティネーションであるニセコの事例をお話します。

なぜニセコにこんなにも多くの人が集まるようになったかということ、2001年のアメリカ同時多発テロの影響でした。当時、オーストラリアでは、スキーホリデーを中止にする人、行き先を変える人も多かったのです。この年に、例年より多くのツアー客がニセコに来ました。これをきっかけに広まったのです。

ニセコの利点は、毎日パウダースノーがあること、近いこと、そして、他の海外スキーリゾートと比較して価格が妥当なところです。日本は、言葉の違いや旅行情報が少ないといった課題があるものの、一度は行ってみたい国です。そして、日本に旅行するとリラックスできる。これはとても大きな価値だと思います。

多くのスキー客を集めるニセコは目的地だけではなく、玄関口・中継地にもなりました。そして、オーストラリアからだけではなく、香港やシンガポールの友人達も集まるようになりました。

当初は、インフラなどの施設や言葉の問題など、海外のスキー客を受け入れるに当たり課題が多かったのですが、徐々に解消されていきました。自分の町がどうすれば良くなるのか。観光による経済効果、社会効果、生活効果等、自分たちにどのようなメリットがあるのかを、まず明らかにする必要があります。海外の人や、移住した多くの日本人が新しい店をどんどん開いています。また、以前から住んでいる住民も海外の人に対応できる店に改良するなど変化が起きました。良い関係性ができていると思います。

海外の人と対応するには、ある程度のレベルの英語が必要です。現在の教育では、英語を話せる人材を育てることは難しいです。現在、インターナショナルバカロレア（IB）（国際的な教育プログラム。3～19歳まで、3つの段階に分けたプログラムがある）のプログラムを地元の高校に取り入れようと運動しています。地域の子どもたちがグローバルな視点を身につければ、その地域は強くなります。ニセコには海外の社長が集まっているので、ビジネスチャンスが転がっています。また、海外からマネージャーを引っ張ろうとした場合にも、その子どもが通えるIBがあると有利です。

次の10年のビジョンを町のトップが発言したり、住民が自分の夢に取り入れれたりすることが大切です。そして、“Out of the box thinking”が必要です。この考え方を日本で実現することはとても難しいですが、徐々に変わってきたと思います。自分の町にアイデアを提案することから始めていきましょう。

実践交流会

北海道内で地域づくりを実践している25名の方が、日々の取組等について、パネルやプロジェクターを用いて発表し、発表者を含めた参加者同士の意見交換ができる場を設けました。この交流会は、会場を5つのブースに分け、時間帯を5つに割り振り進行了ました。参加者は会場で配付されたプログラムを見て、関心のあるブースで熱心に話を聞き、意見交換を行いました。（P12、13参照）

ブース発表終了後も、昼食時間を活用して名刺交換や意見交換など活発な交流が行われました。

ワールド・カフェ

午後からは、84名の参加者によるワールド・カフェを行いました。

ワールド・カフェのテーマは、開発計画のキャッチフレーズでもある「世界の北海道」とし、ファシリテーターは、ワールド・カフェの企画プロデュースを数多く手がけた実績のある札幌大谷大学社会学部助教、丸山宏昌氏が務めました。

始めに参加者を、お互いに知らないメンバー4、5名で構成する18のグループに分けました。各テーブルには、対話を記録するための大きな模造紙とマーカーを配置しました。丸山氏の進行により、テーマである「世界の北海道」を「変化」という切り口で見えていくという方法をとりました。

まず、ワールド・カフェにチェックインするに当たり、世の中の小さな変化（身近なコンビニでの変化等）と大きな変化（人口の変化）がどのようなものかを参加者で話し合いました。「変化」に気づくということが参加者にインプットされたところで、ワールド・カフェによる対話がスタートしました。



丸山 宏昌 氏
札幌大谷大学社会学部 助教

ワールド・カフェとは

「カフェ」で行うような、オープンで自由な会話を通して、活き活きとした意見の交換や、新たな発想の誕生が期待できる、という考え方に基づいたワークショップの手法のひとつです。小グループで席替えを繰り返しながら、あたかも参加者全員が話し合っているような効果を得ることが期待できます。



実践交流会

ワールド・カフェは3ラウンドで構成し、活発な対話を促すため、その合間に、北海道や全国で活躍している4名の方から事例紹介を行いました。対話を進めていくと、各テーブルの模造紙は色とりどりのマーカーで、参加者の考えがどんどん書き込まれていきました。

最後に、参加者がワールド・カフェを通じて最も印象に残ったキーワードの一つを書いて、グループの中でそれを共有し、チェックアウトとなりました。



【ワールド・カフェの流れ】

- チェックイン（趣旨説明、自己紹介等）
- ワールド・カフェ 計3ラウンド
（テーマ）
「身近で感じる変化や、北海道で起きている変化は？」
「その変化と“世界の北海道”はどのようにつながっているのか？」
- 事例紹介（ワールド・カフェの合間に4つの好事例を紹介）
- チェックアウト（参加者が最も印象に残ったキーワードを記入。グループ内で共有し、意見交換）

（参加者が記入したキーワードの一例）

- ・外から見た視点（発見・気づき）
- ・出入りができるコミュニティ
- ・小さな発見 小さな違和感
- ・10年先のビジョン
- ・ローカル＝グローバル
- ・デザインする
- ・人とのつながり→創造性
- ・行動 等



事例紹介①

「タイ人から見た北海道観光の魅力と、地域資源」

タイは親日家が多い国です。以前、「A Message from Thailand」という動画を制作しました。動画を観て分かる通り皆、日本が大好きです。タイ人の旅行人口は年々増加しています。タイのGDPも年々伸びており、裕福な人が増えたことが要因ではないでしょうか。



プーナット・スパークン 氏
合同会社Staylink

日本の中でも特に北海道は人気が高いです。ビザの免除や円安、そして、新千歳空港への直行便ができたことが大きな要因ではないかと思えます。タイ人の旅行者は、日本について人が優しい、それぞれのまちに特徴がある、のんびりできる、といったイメージを持っています。また、北海道に対しては、雪、花畑、乳製品、カニなどのイメージを持っており、食べ物や自然に関心が高いです。最近では、地元の人と積極的に交流できるホームステイツアーや、体験ツアーモデルの人気が高いです。

タイ人は観光情報をSNSによって入手することが多いです。そこで、私は北海道のローカルな情報をタイ語で発信する「Sugoisho Hokkaido」というサイトを

立ち上げました。また、「TABITOMO」というプロジェクトを立ち上げており、北海道のまだ知られていない田舎に外国人と一緒に周遊する国際交流型ツアーを企画しています。

事例紹介②

「世界と地域をつなぐゲストハウスだからこそできるコミュニティづくり」



河嶋 峻 氏
合同会社Staylink 代表

「世界の北海道」というテーマは、私にとって身近であり、常に意識しています。今、ゲストハウスが注目されている理由はいくつかあると思います。外国人観光客の増加が理由だけではなく、宿に泊まるだけでは得られない価値が認められつつあります。日本でも東日本大震災を契機に、人

とのつながりを大事にすることが再度見直され、シェアハウスやゲストハウスの需要が高まっています。

学生時代、東京の大学生を地元の別海町に連れていき、地元の友人と交流するイベントを実施して、とてもやりがいを感じました。これをきっかけに、人と人をつなげることを仕事にしたいと思い、ゲストハウスを札幌に作りました。

ゲストハウスを運営する上で、3つのポイントに注意しています。1つめは「箱づくりを通じたコミュニティづくり」。地域の人を巻き込むことが重要です。地域向けの説明会や改築イベントを行うことで、コミュニティを形成していきました。2つめは、「共感できるプロジェクトか」ということです。3つめは、「その地域の文化・歴史を理解する」。自分たちがイベントを開催するだけでなく、地域のお祭りやボランティア活動に積極的に参加するようにしています。ゲストハウスでは、地域の人に参加できるイベントも定期的実施しています。そうすることで地域の人が「世界」

と近くなります。その入口づくりも行っています。場を作るだけでなく、人が交流したくなるような仕掛けが必要です。

「グローバル」と「ローカル」は、一見相反するようには見えますが、実は重なり合っている関係にあると思います。

事例紹介③

「自分の住む街を自ら楽しみ・創るための5つの方法～名寄市のコミュニティスペースの事例から～」

本題に入る前に、マインドとして大切にしなければならないのは、心の奥にある自分の想いや、小さな変化や違和感に気づくことです。腹の底から湧き上がるようなモチベーションや、やる気をきちんと自分でつかみ取り、かつ周りにおける変化に素早く気づき、受け入れること。それが新しいビジネスや社会課題解決の種です。

今回は、自分が携わってきた取組を通じて、大切だと思っていることを5つの方法ということで、お話しします。

1つめは、仲間を探してつくることです。新しいプロジェクトは、食事会や飲み会から派生していくことが多々あります。それをいかにコーディネートするかが肝です。あらかじめ話したいテーマを投げかけたり、後日話した内容をメモ書きして共有したりしましょう。

2つめは、みんなが楽しくなるように設計することです。プロジェクトを実現する際には、セミオープンなコミュニティを意識的に作っています。

3つめは、未来を見て戦略的に動くことです。

4つめは、答えらしきものに惑わされないことが重要です。活動の中で色々な意見やアドバイスを言う人が出てきます。振り回されずに、見極めることが必要です。



黒井 理恵 氏
㈱DKdo 代表取締役

5つめは、ここが最先端だと思うことです。地域ブランドで成功する可能性があるのは、京都と北海道しかないと思います。しかし、京都はその歴史と文化に自信を持ってどっしりと構えている一方、北海道は東京を見過ぎている気がします。北海道には素晴らしいものがたくさんあります。それに付加価値をつけて、自信を持つことが足りないのではと思います。

私にとって身近なもの一つひとつが「世界」です。コミュニティスペースや名寄市が「世界」。外を見過ぎることなく、本質を突き詰めることが、世界の中の北海道を生き抜くキーワードになると思います。

事例紹介④

「地域の魅力をみんなで高める“ソーシャルデザイン”」

地域資源とデザイン、起業といった視点で、北海道から世界に通用するチャレンジを生み出していけないかというテーマでお話をします。

現在、高知県佐川町という町で、東京に、世界に通用するようなチャレンジづくりの仕事に関わっています。まずは、地域の未来をみんなで描くという活動からスタートしました。総合計画づくりです。「未来づくりサロン」というワークショップを開催し、テーマ別、地域別に対話を続けました。

また、佐川町の地域資源を活かす仕組みとして、「さかわ発明ラボ」を立ち上げました。3Dプリンター*1やレーザーカッターなどのデジタル工作機器の登場や資金調達の多様化により、新しいことにチャレンジしやすくなりました。ラボが地域から浮いた場所にならないように、高齢者から子どもまで、色々な人が関われるワークショップを用意しました。このラボが中心となり、地域の木材を買い上げ、住民や移住者が考えるアイデアを地域内の事業者が形にし、流通させるこ



筧 裕介 氏
特定非営利活動法人
issue + design 代表

とで、町の中に仕事を生み出していきます。

北海道には豊かな地域資源が豊富です。それを活かし、チャレンジできる仕組みを作ることで、もっと「世界の北海道」に近づくとと思います。そのために必要なことを3つあげたいと思います。

1つめはビジョンです。資源を生かして、その町が目指していく姿が明らかになると、やりたいと思う人も集まります。2つめは、新しいことに挑戦できる、インキュベーション*2の仕組みが必要です。そして、3つめは、地域の中にコミュニティが必要です。ともに未来を描き、アクションを具体化する仲間を作らなければいけません。

以前、都市の創造的な力を測定する「創造都市INDEX」というものを開発・調査したことがあります。全国21大都市の中で札幌は17位でした。思ったより低い結果だったので、要因を調べると、地域内の友人は多いものの、地域外の友人が少ないことが分かりました。「弱い紐帯の強み」という理論があります。よく知っている人より、つながりの弱い人が持っている情報が自分の行動に影響を与えているというものです。そのようなネットワークも重要です。

プラットフォーム 「北海道価値創造/パートナーシップ」 メンバー募集中

本プラットフォームでは、全道的な北海道価値創造パートナーシップ会議を開催するほか、プラットフォームに参加する地域づくり人材の取組や活動等を特設サイト等を用いて積極的に発信するなど、様々な取組を展開していきます。

プラットフォームの趣旨にご賛同いただける方は、是非メンバーにご登録ください。メンバーは随時募集しています。

～登録は以下のサイトから～

<https://hokkaido-ps.jp/>

*1 3Dプリンター

3D（三次元）のデジタルデータをもとに立体物を形づくる装置。プリンターが二次元で紙に印刷するように、三次元の造形物を出力する。

*2 インキュベーション

創成期の企業が必要とする経営技術・金銭・人材など様々な援助を提供し、育成すること。

実践交流会

会場を5つのブースに分け、時間帯も11:45から13:00まで5つに分けました。参加者は関心のあるブースで自由に意見交換をしました。

時間 ブース	11:45~12:00	12:00~12:15
A	<p>NPO法人常呂川自然学校 羽根石 晃彦氏</p> <p>「リサーチからの学び・地域発見『ところ川学』」</p> <p>・「ところ川学」とは、常呂川水系の自然環境を活かして、地域に誇りを持ち、社会貢献できる人づくりを目指した地域学プロジェクト。 ・子どもたちに環境教育も提供しており、気づきや感動を通して、自発的な行動につなげる取組を行っている。特に重要なことはリサーチ。全ては調べることから始まる。</p>	<p>NPO法人地域おこし協力隊（下川町） 長岡 哲郎氏</p> <p>「資源を活かし、未来を創る」</p> <p>・外部の人を呼び込むために地域おこし協力隊を導入。 ・NPO法人は、隊員に実験的に働く場を提供するなど、定住のための大きな役割を担っている。 ・地域内の資源、人材、経済を循環させ、質の良い生活を作り出していきたい。そのためには、人的ネットワークが重要。</p>
B	<p>小樽商科大学（本気プロ） 小山田 健氏</p> <p>「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト(通称:本気プロ)について」</p> <p>・「本気プロ」は小樽商科大学の正課科目。地域の活性化に興味のある学生が受講。学生時代に少しでも社会経験を積んでもらおうと始まったプログラム。 ・学生が地域に入り込み、地域の人からの叱咤・激励を受けながら、商店街の活性化など様々なプロジェクトに取り組んでいる。</p>	<p>寿都地域マリンビジョン協議会 瀧山 修市氏</p> <p>「体験交流 in 寿都町」</p> <p>・寿都町では、漁業と観光を融合させた取組をいち早く導入した。 ・様々な体験交流メニューを用意し、民泊を利用した長期宿泊のニーズも高まっている。漁業が不振の中で、貴重な収入源にもなっている。 ・持続的に活動する体制が必要であり、観光物産協会を一般社団法人化した。ここを拠点として、活動を発展させたい。</p>
C	<p>NPO法人えんべつ地域おこし協力隊 塩見 記正氏</p> <p>「地元の産物を活用した地域づくりの一例」</p> <p>・地域おこし協力隊の任期終了後、地域おこし活動を継続するため、NPO法人を立ち上げた。農業とのコラボレーションや子供向けの体験教室等を展開しており、できることから取り組んでいる。 ・27年に道の駅に店舗を立ち上げた。商品の製造・販売の仕組みができたことで、地域内の活動の幅が広がってきたと感じている。</p>	<p>北海道おといねっぶ美術工芸高等学校 伊藤 良平氏</p> <p>「地域とともに生きる高校」</p> <p>・当校では、教育で地域活性化に関わっている。村の住民の約2割が高校関係者となっており、地域との結びつきが強い。生徒は、全員が寮生活であり、全国から集まっている。 ・生徒は、ものづくりの過程で、失敗から多くのことを学ぶ。コミュニケーション能力や「デザインする力」を身につけており、それが自信につながっていると思う。</p>
D	<p>てしかがえこまち推進協議会 木名瀬 佐奈枝氏</p> <p>「北海道弟子屈から観光の未来を拓く てしかがえこまち推進協議会の取組について」</p> <p>・活動のコンセプトは、「誰もが自慢し、誰もが誇れるまち」。 ・観光を軸に、持続可能な地域内循環を大切にしたいまちづくりに取り組んでいる。 ・住民主体、行政参加型の協議会であり、エコツーリズム推進部会や人財育成部会など8つの部会に分かれ、町一体となった取組を進めている。</p>	<p>スローフード・フレンズ北海道 荒井 一洋氏</p> <p>「スローフードフレンズ北海道の取組について」</p> <p>・スローフードの使命は、食を通して丁寧に暮らしを紡ぎながら生き方を見つめ直すこと。 ・ファストフードに見られる単一化や大量消費を見つめ直す必要がある。「地域の中で守られた味を大切に」「環境に優しい生産・消費行動」「公正な価格」を理念に、イタリア発祥の国際プロジェクト「味の箱船」等に取り組んでいる。</p>
E	<p>アニマドール 平島 美紀江氏</p> <p>「農業 × 教育 = アニマドール」</p> <p>・北海道の食・大地を守り、第1次産業の活性化を担い、生産者と生活者をつなげるスペシャリストを養成し、その養成プログラムを確立するプロジェクト。 ・札幌市内の高校と連携し、授業の一環として、商品開発や販売体験、ファームインなど、食と農を軸とした多くの経験を積むことができる場を生徒達に提供している。</p>	<p>一般社団法人北海道ゴルフ観光協会 遠藤 正氏</p> <p>「世界に誇ろう北海道のスポーツツーリズム」</p> <p>・日本全体ではスキー、ゴルフ共に参加人口は減少傾向。そのような中、北海道のスキー環境が外国人に評価され、スキー場ににぎわいが見られるようになった。同じような展開がゴルフでも考えられないか。 ・特にアジア地域は経済成長と共にゴルフ人口は増加中。海外ゴルファーを北海道に呼び込むため、海外旅行バイヤー等を招聘（しょうへい）し実際にプレーしていただいたり、セミナーや商談会を開催。</p>

12:15～12:30	12:30～12:45	12:45～13:00
<p>NPO法人森のこだま 上野 真司氏</p> <p>「地域資源の活用と観光地域づくり」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元の人が目に見えない「雲海」に着目し、観光資源として活用。 ・観光を持続可能なものとするため、ブランディングに地域が関わることが重要。そして、利用者からいただいたお金を資源の再投資に回して、プラスのスパイラルを生み出すことが重要。 	<p>東オホーツクシーニックバイウェイ 高谷 弘志氏</p> <p>「東オホーツクシーニックバイウェイ活動で新たな価値創造」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動エリアは1市5町。観光は広域なものであり、行政や観光協会ではできない立場で、良いと感じるものを情報発信している。 ・ビューポイント景観バスツアーや除雪ボランティアなど、自分達の地域の魅力を見つけ、活かすための様々な活動に取り組んでいる。 	<p>東川振興公社 平田 章洋氏</p> <p>「東川町の地域活性化の取組について」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定住の取組として、婚姻・出生届の写しを発行。これは全国初の事例。子どもが生まれたら、町から名前入りの椅子をプレゼントしている。 ・国際交流にも取り組んでおり、留学生等を積極的に受け入れている。 ・「写真の町」としても様々な取組を行っている。東川町を舞台とした「写真甲子園」が今年映画化される。
<p>函館湾岸価値創造プロジェクトチーム 布村 重樹氏</p> <p>「埋もれた地域資源を活用した観光振興の取組」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域で埋もれた観光資源の価値を創造するため、函館のコンクリート技術や文化に着目し、産学官金連携によりその価値の普及・啓発に取り組むプロジェクトを立ち上げた。 ・関連情報を整理し、パネル展やモニターツアーを実施。今後も様々な活動を展開し、最終的には世界遺産登録を目指していきたい。 	<p>みなとオアシス苫小牧運営協議会 大西 育子氏</p> <p>「みなとオアシス苫小牧の取組について～“みなと”から地域を活性化～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・港をもっと身近なものに感じてもらうため、港の「花いっぱい活動」から開始した。今では写生会や絵画展、「みなとウォーク」等も開催している。 ・食文化の面では、「sea級グルメ大会」に出展し、水揚げ量日本一のホッキを全国にPR。 ・活動を通じて感じていることは、行動と継続が大事。 	<p>南後志地域パートナーシップ活動 本間 崇文氏</p> <p>「農山漁村地域の資源を活かしたサイクル・ツーリズムの推進」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニセコには多くのインバウンド観光客が集まる。「ニセコへ物を、ニセコから人を」、これをキーワードに南後志パートナーシップ活動に取り組んでいる。 ・南後志の食材の売り込みや、人を呼び込むための仕掛けとして、サイクル・ツーリズムのコース設定を検討。ストーリー性を持たせた商品化に取り組んでいる。
<p>萌える天北オロロンルート 西 大志氏</p> <p>「暮らしぶりの映し ～北の光が続く道」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口減少や過疎化が進む中、自分達の地域に自信を持つことができない人が増えてきた。この状況を打破するため、近隣の町同士が連携して地域の活性化に取り組んでいる。 ・留萌管内の「暮らしぶり」そのものに着目し、景観、食、環境保全、レクリエーション、歴史・文化の5分野で活動を展開しており、活動を通じて誇りと自信が醸成されてきたと感じている。 	<p>餅café&stayわが家 堂脇 聖美氏</p> <p>「地域と繋がり、豊かに生きる」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重症アトピー性皮膚炎の湯治治療のため、豊富町に移住。コミュニティーカフェとアトピー湯治者を受け入れる移住体験ホームを運営。 ・地域への恩返しのため、移住仲間5人で豊富温泉盛り上げ隊を結成し、イベントの企画・運営を実施。感謝の気持ちが大事であり、その気持ちがあれば地域とのつながり、人とのつながり、どこにいても豊かに暮らし、そして良い循環を生み出すことができると思う。 	<p>みなとオアシス「わっかない」運営協議会 横澤 輝樹氏</p> <p>「みなとオアシスわっかないの活動と今後の展開」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・副港市場や北防波堤ドーム等の施設を交流拠点としながら、地域のにぎわいづくりのためさまざまなイベントを企画・実施している。 ・イベントの時だけ人が集まるという構造が課題。みなとオアシスわっかないの入口をつくる必要がある。そして、持続可能な取組にするために、今後は「稼ぐ」という視点も必要だと感じている。
<p>とかち・イノベーション・プログラム事務局 三品 幸広氏</p> <p>「とかち・イノベーション・プログラムの挑戦」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・このプログラムは、全国の斬新なアイデアを持つ革新者と、地域の経営者・起業予定者を掛け合わせることで、十勝から新たな事業を生み出していく取組。 ・最終的には、このプログラムから生まれた「火の玉人材集団」が、自発的に様々な事業を生み出し、自律的に回り続けてほしい。 	<p>NPO法人美しい村・鶴居村観光協会 服部 政人氏</p> <p>「2600人の小さな村のロングステイとインバウンド」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小さなことで印象に残るようにと、ロングステイとインバウンドの二つの柱で活動している。二つの活動の共通点として見えてきたのは、「場所」を見に行くよりも、地域住民と「交流」したいということ。 ・交流のコンテンツづくりにはお金がかからず、その地域にしかないプライベートな思い出づくりを提供できる。 	<p>十勝川中流部市民協議会議 和田 哲也氏</p> <p>「環境、教育、防災官・民連携の川づくり」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十勝川では、住民自立を基本に「川づくり」に取り組んでいる。 ・高校連携の取組としては、実習時間を十勝川の川づくりに当てて、環境調査や工事設計・調査を一緒に実施している。 ・地域防災の取組としては、洪水避難情報を登録者にお知らせするシステムの開発や、町内会との防災訓練等に取り組んでいる。
<p>納内地域集落対策協議会 安藤 一彦氏</p> <p>「人口減に負けない「おさむない」のまちづくり」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・納内地域（深川市）に暮らす人々が、住み慣れた地域に、いつまでも暮らし続けたいと思えるように、支えあい・助け合いによる安心・安全なまちづくりや誰でも参加できるふれあい交流事業等に取り組んでいる。 ・住民の憩いの場・交流の場となる「サロンなごみ」の開設・運営や、クラーク記念国際高等学校との連携による交流活動に取り組んでいる。 	<p>NPO法人まち・川づくりサポートセンター 湯浅 芳和氏</p> <p>「石狩川流域の未来に夢を★リパブラ★」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石狩川流域で教育、防災、環境の3本の柱で事業を展開。我々の団体の魅力は、川育という教育部門で色々な人材が育成され、ノウハウが蓄積されてきている。 ・一団体の枠を超えて流域で取り組む「ミズベリリング石狩川」の活動としては、流域が有する環境・資源を、例えばサイクリング、自然体験、食等と組み合わせることでブランド化し、その実現のために石狩川エリアマネジメントを確立する。 	<p>WOMAN 'S ACADEMY 吉成 恵里香氏</p> <p>「ミスコン、ミセスコンから考える美の大地北海道の可能性」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミスコン、ミセスコンを通じて、北海道の活性化に取り組む。世界に直結するこのイベントを道内で開催すると、全国・世界から人が集まる。 ・ミスコン、ミセスコンの北海道代表は北海道の営業マン。北海道のことをよく知っておく必要がある。そのため、候補者を対象に農業体験などを盛り込んだ「ビューティキャンプ」を十勝で実施。女性の感性で、美容と北海道の資源を組み合わせ、そのブランディングに取り組んでいる。